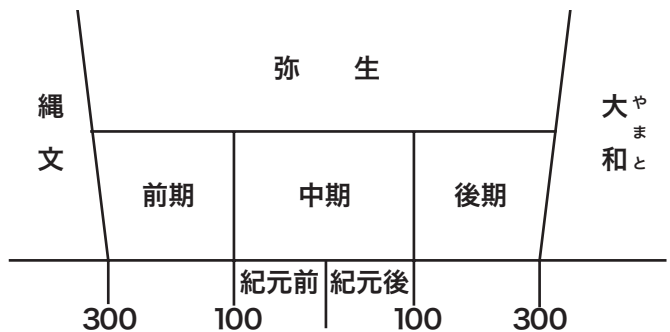


2. 弥生時代

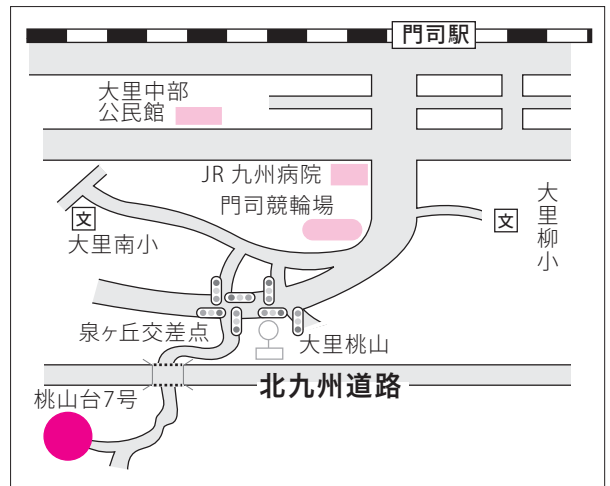
紀元前300年ごろから、約600年間続き、我が国で初めて農耕文化が広まった時代を弥生時代といいます。人々は稲作を行い、米を食べ、より硬く焼いた弥生土器や金属器を暮らしに用いていました。



(1) 大里桃山遺跡に土器を残した大里弥生人



大里桃山遺跡があったらしい所 (牧田 豊氏の私有地内)



大里桃山遺跡へのアクセス

● 大里郷土史家の石崎 巖さん (故人) の話

昭和30(1955)年の夏だったか、村野氏が自宅の裏山を畑にしようとしてくわをふっていたところ、地中から弥生中期の土器や破片が出土したんです。壺や高坏の類でした。ほかに、住居跡のような痕跡もあったようです。出土品は、大里郷土会が保存しています。

「門司市史 第二篇」にも記されていますが、一部に石崎さんの話とはちがう記述がなされています。

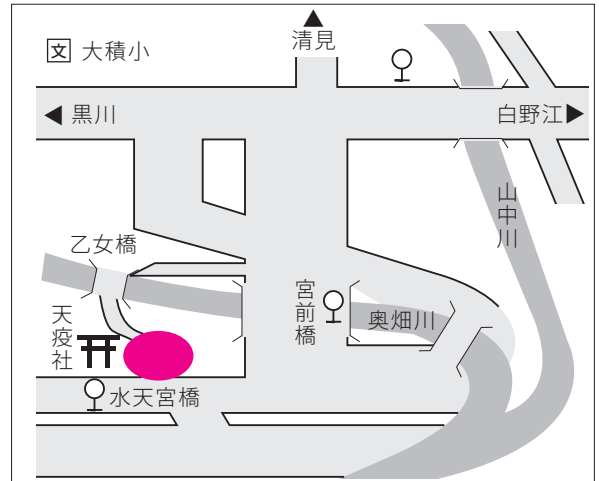
昭和33年春、大里桃山町の村野勝美が、福知山々麓を開墾していたところ、瓶や壺、高坏などの破片がでてきた。調査の結果、弥生式の中期のものであり、なお、その付近から住居跡を示すようなものもあり、興味深いものであった。

福知山というのは、その丘陵の通称なのではないでしょうか。いずれにしても、海岸から遠く、しかもかなりの高地から弥生土器が出土しています。それらの土器は、おそらく祭祀場に置かれていたものでしょう。

(2) 大積^{はまかた}浜方遺跡に土器を残した大積弥生人



大積^{てんえき}浜方遺跡の跡（天疫神社の参道）



大積遺跡へのアクセス

● 古老の和田 武一さん（故人）の話

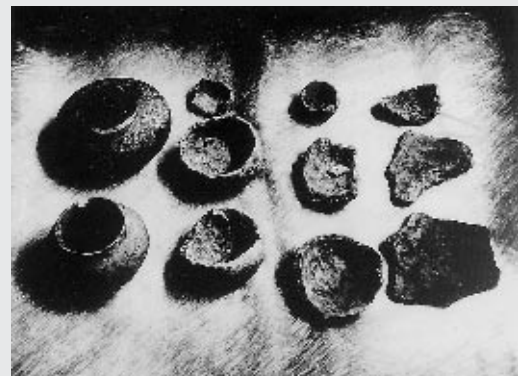
昭和30年の時でした。

当時、天疫神社の参道近くに松の大木がありましたが、マツクイムシにやられて枯れてしまいました。

そこで、大積地区の者と相談して、この枯れ松を株ごと掘り起こして、取り除くことにしたわけです。その時、枯れ松のそばにあった海^{あま}御前さんの墓をついでに神社の中にお移し申し上げて、参道の幅を倍以上に広げようという話がまとまったんです。

枯れ松や墓を掘り起こす作業をしているとき、墓の下あたりから壺やお椀^{わん}のような土器と破片が掘り起こされたんです。

学者先生に見てもらったところ、何でも、弥生時代終わりごろの土器じゃと言うりました。



出土した弥生土器。写真の中央が豆^{まめ}

(3) 中国の古代の史書「魏志」から、大里・大積弥生人の暮らしを見る

魏志は邪馬台国の女王卑弥呼と同じ年代のころ（弥生時代後期）の陳寿という人が書いた中国の歴史書です。

陳寿は、そのころの倭人（古代の中国人が日本人をこのように呼んでいた）の暮らしについて記しています。



魏志倭人伝の原文の一部

<くらしぶり>

- ア、食生活 ● 海辺の男性は、顔や体に入れ墨してサメ除けにし、海中にもぐって、魚類や貝類を採る。
- 食事には小さな器を一人ひとり使って、手で食べる。
 - 稲や野菜を育てて食べている。
- イ、衣生活 ● 麻と桑の木を育て、カイコを飼い、布を織って衣服を作っている。
- ウ、死者の弔い ● ふたのない棺に死者をおさめ、地中に葬ると、盛り土をして墓を作る。

☆ 知恵の進歩が現代人の習慣に生きています。

- アから⇒ ● 海中ではヤス（槍のようなもの）を使って、漁の場を広げたこと。
- これまで、入れ物や煮炊き用の道具であった土器を食器として使う道を開いたこと。
 - 自然から採取するだけでなく、食物の入手方法として、育てるという方法が加わったこと。
- イから⇒ ● それまでの毛皮の衣服から、麻や蚕のまゆから糸を作り、機織り器を発明して、布にして衣服に仕立てたこと。
- ウから⇒ ● 今でも棺（ただしふたがついている）を使っていること。